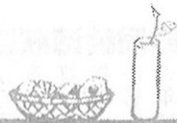


『書くのが苦手』をみきわめる 大学新入生の文章表現力向上をめざして』

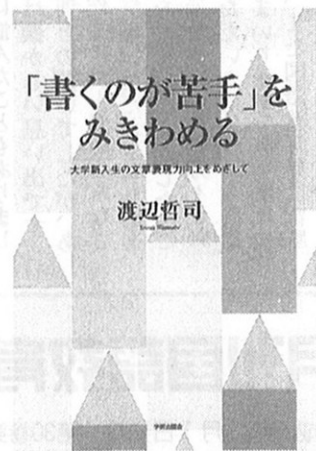


著者の渡辺哲司氏は九州大学のAO入試担当の先生で、初年度の入学者を主な対象とする「レポートの書き方」の指導を重ねてきました。その成果をまとめたのが本書です。表現指導は高校でもなかなか行われておらず、まして大学でそれに熱心な方は少く、貴重な一冊です。

本書のユニークさは、『書くのが苦手』をみきわめる』というタイトルからもわかるでしょう。大学生のレポートの単なる方法論だけではなく、「書くのが苦手」と思いこまされている心理と背景まで遡って問題を考察し、その対策をまとめています。

「書くのが苦手」の背景には、小学校から高校までの教育の問題があります。そこでは系統的な表現指導がきちんと行われていません。書く機会は夏休みの「感想文」ぐらいしかなく、しかも提出された文章への指導すら行われていないようです。そうした表現指導のデタラメさだけではなく、国語科の読解指導では間違った「文章観」（きれい事や建前論、道徳的なしぼり）が植え付けられているのではないのでしょうか。社会や理科のレポートやプレゼンなどでは、主観的感想を排除するような、枠はめ的指導が主に行われています。その結果が「書くのが苦手」な大学生の大量発生ではないのでしょうか。

新しい学習指導要領では、全教科での言語活動が謳われ、その中心として国語科の強い指導力が求められます。先生方には本書に描かれた実態を直視し、その対策を真剣に考えていただきたく思います。(中井浩一)



渡辺哲司 著
学術出版会
1,600円＋税
2010年